

鬼怒川中流部における礫河原再生に係る地域連携方策について

Regional Alliance Approach in Restoration of Gravel Bars in the Middle Reaches of the Kinu River

水循環・まちづくりグループ 研究員 恵美 進一
 生態系グループ 次 長 清水 俊夫
 河川・海岸グループ 研究員 川田 貴章
 生態系グループ 研究員 山西 陽子

1. はじめに

鬼怒川中流部では、かつては大礫や巨石を含む広大な礫河原が存在し、そこには礫河原固有の動植物が生息・生育する全国でも希少な礫河原環境を有していた。

しかし、近年は澇筋が固定化され比高差が拡大したため、シナダレスズメガヤ等の外来種が侵入し、鬼怒川が本来有していた礫河原が失われつつある。

このため、平成 18 年度より礫河原固有生物の生息・生育に適した環境の再生を目的とした「鬼怒川礫河原再生事業」が進められている。地元市民団体を中心に、カワラノギク等の礫河原固有植物の保全を目的としたシナダレスズメガヤ等の外来植物除去活動の取り組みが活発に進められてきたものの、その範囲は限定的であった。



写真-1 シナダレスズメガヤ(左)とカワラノギク(右)

そこで、外来種除去と礫河原固有種の保全をより広域的、かつ効果的・効率的に推進するための地域連携方策として「鬼怒川の外来種対策を考える懇談会」(以下“懇談会”という)が平成 22 年 3 月に設立され、これまでに 9 回開催されている。

本報告は、懇談会の経緯および平成 28 年 2 月に実施された第 9 回懇談会における意見やその対応をもとに、地域連携方策のあり方についてとりまとめたものである。

鬼怒川における外来種対策の取り組み区間は、鬼怒川中流部 83.0~101.5k である。写真-2 に外来種対策の一例(シナダレスズメガヤ除去作業)を、図-1 に外来種対策の取組区間位置図を示す。



写真-2 外来種対策の一例(シナダレスズメガヤ除去作業)



図-1 外来種対策の取り組み区間位置図

2. 地域連携による礫河原再生の必要性

鬼怒川の礫河原再生に関しては、学識経験者、地元市民団体、関係行政機関で構成する鬼怒川河道再生検討委員会により平成 22 年 3 月に「鬼怒川中流部礫河原再生計画(案)」がまとめられた。当該計画に基づいて、砂州を切り下げ、大礫堆を復元することにより砂州を複列化させ礫河原を再生する事業が進められてきた。試験施工のモニタリング調査結果から、大礫堆の設置や砂州の切り下げ等により複列砂州が形成・維持される一方で、シナダレスズメガヤが再繁茂する可能性が高いことも示唆された。礫河原固有種の生息・生育に適した環境の維持のためにはシナダレスズメガヤが再繁茂しないための対策が必要と考えられた。

こうした観点から、礫河原再生の取り組みの一環として、地域住民や関係団体、学識者、関係行政機関との連携・協働による維持管理を推進していく枠組作りが重要であり、取り組みに対するさらなる理解を深め、連携強化を図っていく必要がある。

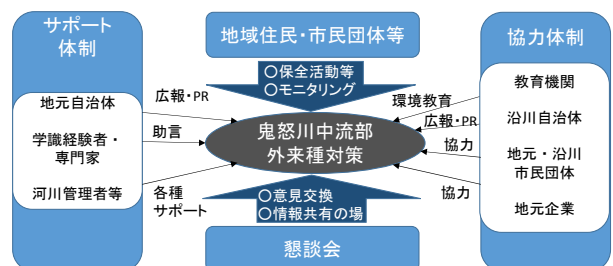


図-2 鬼怒川中流部における地域連携活動の枠組

3. 外来種対策の取り組みと懇談会の運営

鬼怒川中流部は、「うじいえ自然に親しむ会」や「押上水神会」等の市民団体が中心となって積極的にシナダレスズメガヤの駆除やカララノギクの保全活動が行われてきた。

懇談会は情報共有によってより効果的に今後の鬼怒川における環境保全活動の促進を図るため、意見交換を行い、役割分担、広報等についてとりまとめ、実践することを目的としている。河川管理者である下館河川事務所は沿川(全体)の市民団体や自治体に対し、鬼怒川本来の礫河原固有生物の重要性や外来種対策の必要性等について説明を行い、懇談会へ参加の働きかけを行った。その結果、参加団体は自治体や市民団体も加わる等 27 団体に拡大し、外来種対策の取り組みおよびその活動ネットワークが広域化・深化した。

表-1 懇談会の経緯および加入団体の推移

懇談会	市民団体の参加	組織体制づくり	教育機関加入状況	自治体加入	役割分担	広報対応
第1回 H22.3	うじいえ自然に親しむ会 押上水神会 さくら市ガールズスカウト第20団 3団体がスタート	ボランティアによる監視範囲に協力している団体がいるのでメンバーに入れるべき 活動を行う人員不足		さくら市 船木町 (下館事務所)		H22.3.12の下野新聞が第1回懇談会の様子を掲載 下館事務所が啓発用パンフレット(案)を提示
第2回 H22.12	とちぎMPG加入→4団体	種子供給源である上流沿川地区における対策が必要 宇都宮市をはじめとする沿川自治体の協力が要			地域住民、河川管理者、自治体、学識者の役割分担の整理	パンフレットにシルビアシジミの生息場所は明示しない。監視活動実施中であることを明示 パンフレットを活用した広報・PRは重要
第3回 H23.3		教育機関は環境学習や人材育成として位置づけるべき シナダレスズメガヤ対策は上流との連携が必要	宇都宮白橋高校 さくら市立押上小学校	宇都宮市 高根沢町 塩谷町 日光市	地域連携窓口: 下館河川事務所 個益等の提供: 下館河川事務所 駆除活動実施: 市民団体 広報PR: 沿川自治体 アドバイザー:学識者	
第4回 H23.11	中流域の4団体が加入 ・宇都宮シルビアシジミを守る会 ・平石カララノギクを守る会 ・たかねらさくら青年会議所 ・氏家ロータリークラブ 日光市から1団体加入 ・今市の自然を知る会		さくら市立清修高校 さくら市立氏家小学校 さくら市立南小学校			
第5回 H24.2	塩谷町から2団体加入 ・大久保まちづくり推進委員会 ・オキナグサを守る会					シルビアシジミの保全看板を2箇所5枚立てたが国交省による看板設置は可能か
第6回 H25.2				日光砂防事務所		啓発活動の一環として国交省による看板設置は可能か
第7回 H26.2						環境広報看板を10箇所設置(国交省)
第8回 H27.2			日・舞学園高等学校			希少種などの写真をつけた環境広告看板を10箇所設置(国交省) オオキナグサが開花する6月・7月の市の広報で、市民に駆除の協力を呼びかけ(さくら市)
第9回 H28.2						下館河川事務所HPを改良し、行事、イベント、募集頁を追加(国交省)

は、事前アンケートにより平成27年9月の洪水でカララノギクがほぼ全滅し、十分な種が採取できなかったため、種を提供していただける団体があったらお願いしたい等の要望が出された。

懇談会では、平成27年9月の洪水により、濡筋が変化し、シナダレスズメガヤが生育している中州が流されている一方で、シルビアシジミの生息地が消失する等の影響があった等の報告がなされた。シルビアシジミの食草であるミヤコグサの生育地を冠水に影響のない堤外地に確保した方が良いとの意見に対して、除草を懇談会メンバーと河川管理者で実施していくと良い、等の具体策が提示された。また、オキナグサの鑑賞会のツアーが好評を得ていることから、行政側からの情報発信も実施すると良い等の意見が出された。



写真-3 シルビアシジミ



写真-4 第9回懇談会の様子

表-2 第9回懇談会での意見と対応(案)

区分	意見	対応案
洪水後の礫河原の植生	○中州が復活しシナダレスズメガヤが流されてきれいな礫河原が復活したが、シルビアシジミの生息地が大部分消失した。	○モニタリングの実施 ・復活する植生は、何が優占種となるか、回復の時間差等の観点が重要。
シルビアシジミの保全	○冠水により堤防上の生息地がほぼ消失し、シルビアシジミの回復は難しい。 ○堤防の除草回数減少がミヤコグサの生育に影響を与えているのではないか。	○モニタリングの実施 ・予算面から堤防の除草回数を増やすのは難しい。一部区間を限定してモニタリングする事は可能。 ・除草回数を増やすためには、懇談会メンバーの協力を得る方法を検討していく。
貴重植物見学会と環境保全活動	○旅行会社を通したオキナグサの鑑賞会は地域の活性化にもなり、地元の方にも関心を持ってもらい環境保全に協力して欲しいという趣旨で実施している。 ○この種の行事は、行政の協力が重要。	○情報の提供 ・関係市町村の各団体の活動予定や結果に関してホームページで情報発信するとともに、既存パンフレットの更新を図る。

4. 懇談会の運営について

本研究では、懇談会の設立趣旨を踏まえ、地域住民等が過度な負担なく活動を継続していくために、環境保全に関する活動状況や要望、悩み等を事前アンケートにより抽出し、その内容を踏まえた各団体における活動状況の紹介や要望、悩み等に関する議論を深める場となるような運営を行った。

平成28年2月17日に開催された第9回懇談会で

5. さいごに

鬼怒川の外来種対策は、地元市民団体等の主体的活動となって定着しているが、今後も懇談会等における関係者間の情報共有や意見交換を通じて、国、関係者が連携・サポートできる組織体制の充実が重要と考える。同時に、地域連携のあり方としては、活動を継続していくための方策、具体的には各団体が自発的に懇談会に参加する雰囲気作りが必要であると考えられる。

<参考文献>

- 1) 小野寺翔, 清水俊夫, 山西陽子: 鬼怒川中流部における礫河原再生事業の評価・検証, リバーフロント研究所報告第26号
- 2) 下館河川事務所: 鬼怒川中流部礫河原再生計画(案) (2010)